様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月２８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０２６４
研究課題名（和文）　初期近代イングランドにおける民衆文芸に関する学際的研究

研究課題名（英文）　An Interdisciplinary Study on Popular Literature in Early Modern England

研究代表者
佐藤　和哉（SATO KAZUYA）
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：００２３５３２６

研究成果の概要（和文）：
本研究では、初期近代イングランドにおける民衆向け出版物について、その出版と受容の様態を具体的に確認し、同時代的なテクストと併置しながらその内容を精査することによって、これらの出版物が民衆レベルでのナショナリズムの進展に寄与するとともに、権力に対する民衆の価値観の保守化を促すものであったことを解明した。以上の研究を通じて、この時代の「ポピュラー・カルチャー」という概念そのものの見直しにまで到達した。

研究成果の概要（英文）：
In this study, situations of publishing and reception of popular literature in early modern England are examined. By means of close reading, in juxtaposition with other types of contemporary publications, it is revealed that popular literature of the period contributed to the dissemination of nationalism among the common readers, as well as promoted conservatism in terms of their value judgment toward politics. Through this study, the notion of “popular culture” itself requires to be re-examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：民衆文化　チャップ・ブック　読書の歴史

１．研究開始当初の背景
(1) 本研究の申請者佐藤和哉は、初期近代、とくに 18 世紀のイングランドにおいて周辺的な地位に置かれていた「子ども」や「民衆」の文芸を研究してきた。なかでも、この時代の印刷物の出版・流通・受容に焦点を当てて研究を進め、従来の研究では民衆向けのものと考えられていた出版物が実際に社会のな

かで果たしていた機能を明らかにしてきた。それと並んで、初期近代に存在していた民衆文化とエリート文化をつなぐ中間的な文化の役割に関して、個別具体的な作品を研究し、そのなかに民衆の価値観を探ろうとする論文を発表するとともに、日本英文学会、日本西洋史学会、そのほかの機会に口頭発表を行ってきた。これまで申請者が中心的な資料としてきたのは、当時のイングランドで「物語集（ヒストリーズ）」と呼ばれ、後世の古物蒐集家や研究者によって「チャップ・ブック」と名づけられた一群の民衆出版物である。

(2) 初期近代イングランドの民衆を対象として出版されたとされる出版物に関する研究は、本邦においては極めて少なかった。中世ドイツ史に関する阿部謹也氏の研究は参考になるところは多いが、時代と地域が異なるし、おそらく、イングランドに関する本研究の問題関心ともっとも近いのは川島昭夫氏によるブロードサイド・バラッドに関してのものだったと思われる。また、比較的早い時期から小野二郎による言及もあったが、その後議論が深化した形跡は見られなかった。

(3) イギリスにおいては、マーガレット・スパフォードやヴィクター・ニューバーグによって、1960 年代末から 80 年代にかけて行われてきた。いずれも、17 世紀から 18 世紀にかけての印刷出版業者の盛衰や販売網について、また、民衆教育や識字能力との関連について優れた業績であるものの、出版物の内容に関する議論は充分であるとは言えない。近年では、民衆文化に関するティム・ハリスらによる論文集のなかで、これらの出版物に言及されているほか、ニュー・ジーランドの研究者、バリー・レイが初期近代イングランドの民衆文化についての概論を書くなかで、やはり取り上げてはいるが、近年では民衆向け出版物に関するモノグラフは書かれていなかった。

２．研究の目的

イギリスの民衆文芸の研究を進めるために、資料の収集を進めながら理論的な観点からの考察を進める。現在入手可能なマイクロ資料の収集、および現地の図書館における調査を通じて、網羅的な資料の収集と電子情報として利用可能な形での整理を試みる。また、資料的な整備の遅れている分野でもあるので、分析の対象とするテクストの同定や整理、出版史的な位置づけを行い、発展的な研究のための基盤を整える。一方、歴史研究における言語論的転回を踏まえたうえで、近年文学研究で提唱されているインターテクスト論を大胆に応用することで、「物語集」を時代のコンテクストのなかで織り成されたインターテクストの一部として研究するための理論的基盤を整えたい。

３．研究の方法

(1) 初期近代イングランドの民衆文化の一要素として「物語集（ヒストリーズ）」を考えるとき、第一に検討しなければならないのは、資料そのものを精査することの重要性である（一般には「チャップ・ブック」という呼称で呼ばれる一群の冊子群のことであるが、近年、この呼び名の不正確さが問われるようになり、ここでは「物語集」で統一する）。「物語集」には、ほとんどの場合インプリント（出版に関わる書誌情報）が記載されておらず、カタログなどの記載もいきおい推測に頼らざるを得ない。その場合、ある特定の冊子の同定に関しては、その中に用いられている木版画のブロックや用いられている活字、場合によっては紙の種類などを点検することによって行うこともある。したがって、研究のさまざまな局面において、可能な限り多く「物語集」の実物に実際触れる必要がある。そのため、マイクロ資料を渉猟し、それらを用いるのも当然であるが、それ以外にも夏期休暇中などを利用して、一定期間、必要な資料を所蔵する図書館に通い、現物を見る。さらに、各種オンラインデータベースも活用した。

(2)「物語集」は、その起源において、さまざまである。中世以来ヨーロッパで伝えられてきた騎士物語、近世の笑話集、民間説話、伝説、口承伝承、流行歌、猟奇犯罪の口伝えによる伝播、バラッドなど実に多岐にわたる。中には、ボッカチオの『デカメロン』の一部や、16世紀末に文筆活動をしていたトマス・デローニーの書いた物語、デフォーやスウィフトの作品のダイジェスト版も見ることができる。それらは「物語集」のインターテクストとして機能した。つまり、それらの＜読者＝聴衆＞にとって、そういう物語や伝説はよく知られていたはずであり、「物語集」の研究はその点を前提としなければならない。民衆文化史の研究者は、通常、このような文芸的慣習や文学作品との関係については考慮の対象外とすることが多く、あまり扱われることがない。また一方で、文学作品の研究者は、これらを「民衆文化史」という枠組みで見ることが少ない。本研究の特色は、これらの二つの分野の融合にあるので、資料の検討のあとにこの研究が向かったのは、「物語集」のインターテクストの研究であった。具体的に

は、今、ここで名前を挙げた、デローニーのテクストと「物語集」に収められたヴァージョンとの比較検討を行った。デローニーはエリザベス朝の職人作家として、エリート文化と民衆文化の境界にそもそも位置していた作家であるので、ここでの「物語集」との親和性はそもそもよい。だが、詳細にデローニーのオリジナルと「物語集」とのヴァージョンとを比較することによって、それぞれの＜読者＝聴衆＞が求めたものの相違を見出すことができた。

(3) 印刷出版業者のカタログにおいては、すべて「物語集」として扱われることがほとんどであるが、その出自が前述のようにさまざまであることからも分かるように、内容も多岐にわたる。魔術をテーマにしたものと、キリストの教えを説くものの両方があるなど、ときには互いに矛盾するような内容のものさえ含まれている。そのため、それがどのような「ジャンル」に属するかが非常に重要になる。たとえば、笑話のなかに現れる価値観とメロドラマの示す価値観は真正面から対立することがある。そのために、その物語がどのような「ジャンル」に属していて、それらのジャンルが当時どのように受け止められていたかに関して、当時の文芸雑誌・批評論などを広く渉猟した。

４．研究成果

(1) ①本研究の中心的な史料である「物語集」と呼ばれる小冊子群は、出版、流通、受容（読書）のどの局面についても情報が少ないことからきわめて扱いにくい史料である。しかし、そのなかでも比較的まれではあるが、ダイシーという印刷出版業者の一族は 18 世紀ロンドンで「物語集」を出版していたことで知られていて、業者が特定できるところから、歴史研究の一つの足がかりとなりうるものと考えられる。今回、ブリティッシュ・ライブラリーおよびオクスフォード大学ボードリアン図書館での調査によって、ダイシー社が出版していた「物語集」のうち 94 点を確認することができた。印刷出版業者が確認されるテクストを確定することによって、当時の出版文化の文脈のなかで「物語集」の占める位置を考えるうえでの手がかりができたと言える。

②受容の点では、「物語集」に頻出する登場人物「巨人殺しのジャック」に着目し、この人物の登場する「物語」の初出が 1710 年代よりもさかのぼらないのにも関わらず、オンライン版『18 世紀出版カタログ』（ＥＣＣＯ）の全テクストデータベースを用いて検索することによって、「ジャック」への言及が 40 年代の教育書、60 年代の小話集、世紀末のエドモンド・バークの伝記、などさまざまなテクストのなかで為されていることを発見した。「物語集」の登場人物がいわゆる「エリート文化」の領域に属するテクストにも現れることをつきとめたので、「民衆向け」とされるテクストの受容の様態を考えるうえでの有力なヒントとなりうる。

(2) ①　2008 年度の研究は大きく三つの焦点を持つ。第一は、理論的な側面における進展である。この年度は、歴史学以外の分野からの示唆を多く得た。たとえば、文化人類学においては口承文化と文字文化の関係についてすでに研究の蓄積があるが、それを、本研究がテーマとする初期近代イングランドにおける民衆向け出版物を研究する際に応用できないか、モデルケースについて考え始めている。また、そのような出版物に顕著な特徴の一つに、英雄譚が頻出することが挙げられるが、「英雄像」の研究は神話学、民俗学、文学、それに歴史学など領域横断的に取り組まれるべきものであり、その点でも研究のなかに学際的視座を設定することができるようになった。

②第二に、民衆向け出版物の系譜の問題である。一般にこれらの出版物においては作者が明確でないことが多いが、一つ一つの作品について精査すると、16、17 世紀の作家の手になるものを散見することができる。リチャード・ジョンソン（1573 年生－1659 年没？）やマーティン・パーカー（1656 年没？）、それにトマス・デローニー（1543 年生？－1600 年没）などがそれにあたり、いずれもいわゆる英文学上の「正典（キャノン）」を作り出すような作家ではなかったが、一般読者には広く親しまれたようである。これらの作家から 18 世紀の民衆向け出版物の系譜をたどることはいまだに行われていない仕事であり、その端緒を開くことができた。

③第三に、19 世紀における民俗学の高まりのなかで、18 世紀の民衆向け出版物は尚古的関心からもっぱら取り扱われてきたため、その後の歴史学研究者が正当にその学問的評価を下してきたとは限らなかった。今年度の資料収集の過程において、これまで素人の趣味的な研究、言及とされてきた、ヴィクトリア朝に出版された民俗学的テクストのなかに重要なコメントを発見することができた。

(3) ①最終年度は、初期近代イングランドに

おける民衆向け出版物に関する研究の総括を行った。第一に、民衆向け出版物とナショナリズムとの関連である。本研究の中心的資料である「物語集」は、さまざまな地方でほぼ同じ内容のものが出版され、読まれていた。これまであまり指摘されてこなかったが、「物語集」のタイトルには、「ウォリック」のガイや「ニューベリー」のジャックなどのようにイングランド各地の地名が頻出する。また、時代についても、「ウェストミンスタのメグ」では、16 世紀はじめにヘンリ八世がフランスを攻めたときの戦いに従軍していることが語られているなど、具体的な歴史上の言及も多い。このような地理的、歴史的な認識は「集中型」読書によって民衆にくり返しインプットされ、地域横断的な「想像の共同体」の形成に寄与するところが大きかった、というのが本研究の発見である。これまで「ローカル」なものと考えられてきたポピュラー・カルチャーは出版物という形式を通じてナショナルな広がりを見せ、この時代のナショナリズム形成の一端を担った。

②第二に、民衆による暴動を扱った「物語集」のテクストの精査を通じて、民衆の「権力」に関する認識と価値意識の様態が検討された。従来のポピュラー・カルチャー研究においては、民衆は抑圧される側として権力を認識するものとされ、非抑圧者に共感するものと考えられていたが、本研究で対象としたテクストでは、「反乱」や「暴動」が強い非難の対象として表象される一方で、それを鎮圧する英雄に共感が向けられており、これらの娯楽的読み物においては民衆の保守性が発露することが明らかとなった。

以上のように、本研究は、民衆向け出版物の研究を通じて、初期近代イングランドにおける「ポピュラー・カルチャー」という概念そのものの見直しにまで到達しえたと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
(1) 佐藤和哉「巨人退治と民衆暴動―民衆向け出版物における「反乱」と「鎮圧」の表象―」『日本女子大学　文学部　紀要』（査読無し）、第59号、2010年、29〜39ページ

〔学会発表〕（計４件）
(1) 佐藤和哉「ルイス・キャロルと時代精神―科学・技術・帝国―」（招待講演）第15回日本ルイス・キャロル協会研究大会、2009年10月31日、於昭和女子大学
(2) 佐藤和哉「『物語集』の史料論的検討―初期近代イングランドにおける『ポピュラー・カルチャー』の概念をめぐって―」日本西洋史学会第59回大会、2009年６月14日、於専修大学生田校舎
(3) 佐藤和哉「18世紀イングランドの民衆向け出版物を読む」一橋大学社会科学古典資料センター主催「西洋社会科学古典資料講習会」2008年11月11日、於一橋大学
(4) 佐藤和哉「『マザーグースのメロディ、または子どものためのソネット』をめぐって」（招待講演）学習院大学英文学会2007年度講演会、2007年11月10日、於学習院大学

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　和哉（SATO KAZUYA）
日本女子大学文学部・准教授
研究者番号：００２３５３２６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし